

松波むかし語り ここに住み続けて

その39

今回のお客様

弥生小学校校長の
つかもと みつる
塚本 充さん 60歳

“子どもに教えながら、また子どもに教えら
れる。教師っていい仕事ですよ！”



今年の6月9日、塚本先生がちょうど60歳の誕生日のこの日、弥生小が60周年の記念式典を迎えるというおめでたい出来事がありました。昭和28年に誕生した弥生小ですが、先生は昭和27年、北九州市若松区で生まれました。

「子どもの頃に若戸大橋ができ、夜になると洞海湾をバックに八幡製鉄の煙突から赤い煙が勢いよくあがっているのが見えてきれいでした」。国内の製鉄業がもっとも元気な時代で、そうした状況を反映して若松・戸畑など5つの市が合併して北九州市が誕生し、街に活気がみなぎっていた時代でした。やがて筑豊の炭鉱も重工業中心の工業地帯も斜陽を迎えるのですが、そんな移り変わりを目に焼き付けながら先生は高校1年のとき県内の青堀に越してきます。

「青堀から、その当時はまだ蒸気機関車が引く客車にゆられて千葉の高校に通ったものです」。そして工業高校を卒業して1年、民間企業に勤めましたが、「工場より人が相手の仕事をしてみたい」と受験勉強をして千葉大に入学します。教師生活は想像した通りでしたか？ 「子どもに教えながら、子どもたちからもいろいろと教えられる。鉄棒の難しい技も子どもたちから教えてもらったり、難しい漢字も書けるようになりました(笑)」。先生は教師という職を「勉強させてもらってお金がもらえるいい仕事」と語ります。そして、「『この先生が担任になったら子どもたちが元気になった』というように、教師の果たす力の大きさを感じることがあります」とも。「教える」ことの可能性を感じる言葉です。

松波の印象はいかがですか？ 「教師生活では千葉大の附属小に14年いましたし、最後の赴任校が弥生小ですから、大学生活を合わせてながくこの近辺で過ごしてきました。このあたりは私のホームグラウンドです」。しかし弥生小は、昭和30年代の1000人を超える規模と比べると学年が1クラスと小さくなりましたね？ 「そうですね、各学年が3クラスほどあって子どもたちの交流があったほうがいいとも思いますが、でも小さな学校には、たとえば人間関係の密度が濃いというような良さもありますから一概には言えないと思います。弥生小の子は落ち着いているし仲がいいですよ。「30人31脚」がその原動力の一つとか。「体力が付きますし、協調性、チームワークや落ち着きもよくなりますね。「教師はほかの職業にないありがたい仕事」と語る先生は、来年3月、退職を迎えます。



生徒互助精神のシンボル像



30人31脚走では全国大会準優勝の実力を持つ